

児童養護施設における子どもと職員それぞれの 「存在」の捉え方に関する研究

指導教員 有村大士 先生
岩立 祐

はじめに

人が生きていく中で自分を知るといことは人生を豊かにする、という考えは、私が児童養護施設で育ち現在までの経験から得た考えである。

知ることは自分の歴史を、自らの育った環境について自分なりの答えを持たせることから始められはしないだろうか。それには現在の自分の状況について知り、理解することから始まるのではないか。

児童養護施設で育っている子どもたちはどのように自分というものを知り、考え、理解しているのだろうか。また自らが育つ環境である児童養護施設というものを、どのように捉えているのだろうか。

私は自分の歴史、つまり自分にとっての児童養護施設というものと向き合い、自分の歴史の舞台である児童養護施設は社会的なシステムではなくそこで出会った人々によって構成されている、と捉えていると気づいた。

しかし当時の私は生活を共にする人をどう捉えているのか。自分は生活を共にする人にどう捉えられているのかについて自分の答えを持っていなかった。

施設であり、家である。それを知り、職員という存在の曖昧さを感じながら生活してきたように思う。一方、職員が自分のことをどのように捉えているのか、また職員にどのような理想像を持たれているのかもあやふやであった。

しかし今では職員も自身が子どもにどう捉えられているのか、また子どもにどのような理想像を持たれているのか分からず悩み、児童養護施設の

子どもにとっての自身の存在についても悩み、他にも多くの悩みを持っていることを知った。

それでも私は、それでも職員には自信を持って胸を張ってほしいかった。もしかすると職員もそう思っていたのだろうか。

これらの経験や考えから、児童養護施設の子どもと職員双方は、お互いの思いをより知りあうことから始めることが必要なのではないかと考えた。

また児童養護施設という場においては、子どもを支援する職員がその存在について自分なりの答えを持ち、相手の考えや思いを更に知ることでより良質な支援を子どもに提供できると考えたためでもある。

先行研究の検討

先行研究では職員を対象とした調査は児童養護施設での「仕事」に対する調査及び研究は多く見られたが、子どもと職員の存在の捉え方について取り上げたものは数少なく、また生活と仕事という子どもと職員の差がある中でのお互いの存在の捉え方についての調査及び研究は見られなかった。

また、児童養護施設における子どもと職員の関係性について当事者の声が重要だという認識はあり調査の数は多くないながらも見受けられたが、インタビューや自由記述アンケートをもとにした調査が大部分であった。また、お互いの存在の捉え方を図る尺度の作成やそれに基づいた数量的研究を行った調査は確認できなかった。

研究目的

本研究では、児童養護施設における子どもと職員との存在の捉え方について特に不足していると思われる、現在施設に在所中の子どもが捉えている職員の存在について明らかにすることを目的とし、探索的に尺度の作成および数量的研究を行う。

これは子どもと職員が相互に存在の捉え方を知ることが、自分なりの相手の存在についての答えを見つけ、自信を持ち、自分の歴史を肯定的に捉えるための第一歩となり、自らの人生を豊かにするという考えに基づく。そして特に児童養護施設では職員が相手（子ども）を知ることが、子どもへの支援の質の向上に繋がると考えるからである。

研究方法

フォーカスグループインタビュー調査を行い、その結果からアンケート票を作成、アンケート調査を行い、その結果を分析した。これは職員の存在の捉え方と子どもの存在の捉え方の違いを明らかにし、双方向的な分析を行うことを重要視したためである。

またインタビュー対象者は現職職員、アンケート調査対象は現在児童養護施設で生活する子どもであり、事前に倫理的配慮について同意をいただいている。調査結果の分析法は単純集計、因子分析、クラスタ分析の3つの分析方法を使用する。

調査票作成に向けた

フォーカスグループインタビューの結果

インタビュー内容

- ①自分は児童養護施設の子どもにとってどのような存在か。
- ②自分は児童養護施設の子どもの中でどのような存在でありたいと思うか。
- ③自分にとって児童養護施設の子どもはどのような存在か。
- ④自分の中で児童養護施設の子どもはどのような存在であってほしいか。
- ⑤どのような関係をもった働き方をしたら、双方に良い存在であることができるか。

インタビューの結果

分析の方法

インタビュー内容から逐語録を作成し、KJ法を参考にカードを作成した。そのカードの持つ“要素”に注目し、カードを“要素”ごとにグルーピングし、表札を付け、空間配置を行った。それを図式化したものが以下の図1～5である。図6は図1～5を総合して整理したものである。

図1「①自分は児童養護施設の子どもにとってどのような存在か」

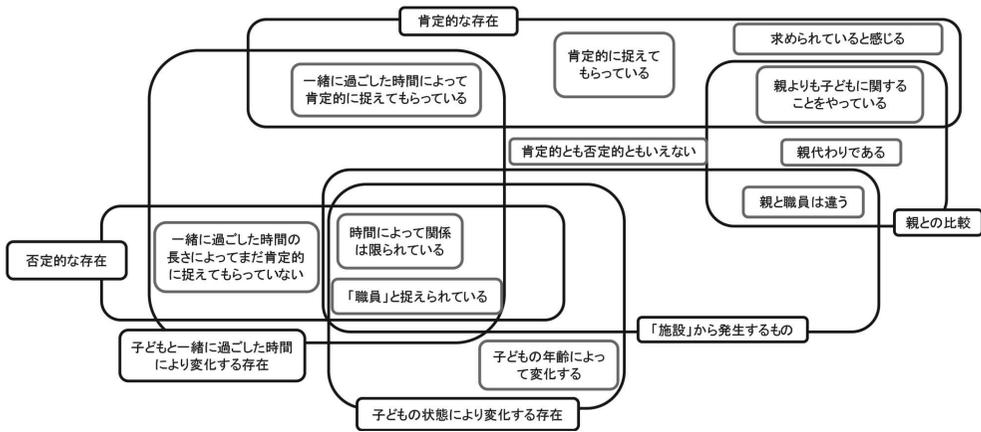


図2「②自分は児童養護施設の子どもの中でどのような存在でありたいと思うか」

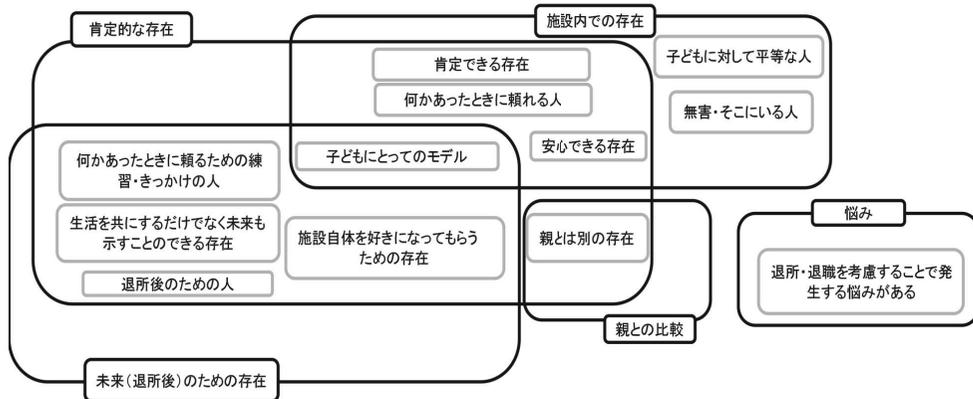


図3「③自分にとって児童養護施設の子どもはどのような存在か」

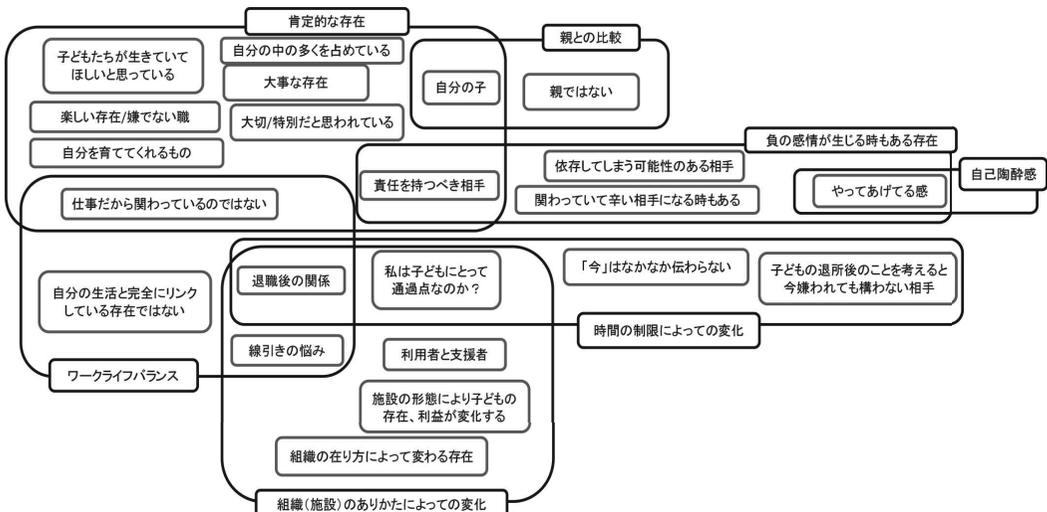


図4「④自分の中で児童養護施設の子どもほどのような存在であってほしいか」

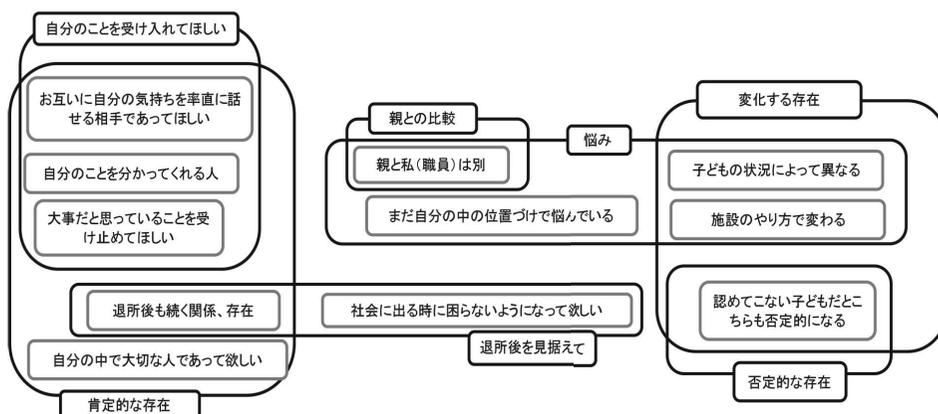
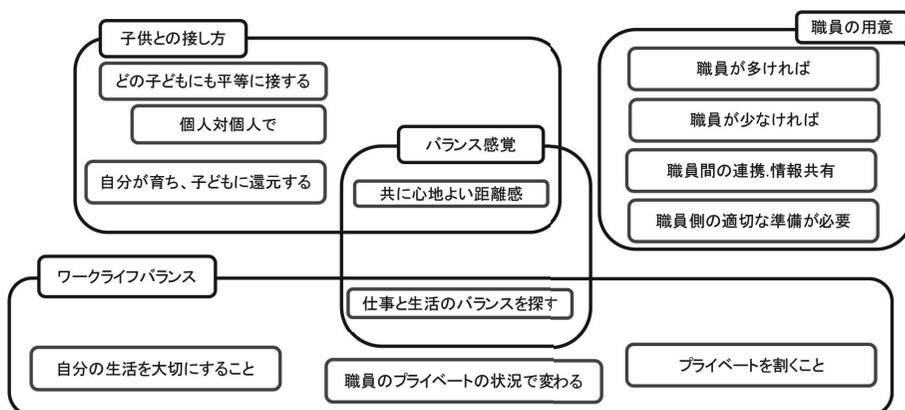


図5「⑤どのような関係もった働き方をしたら、双方に良い存在であることができるか」

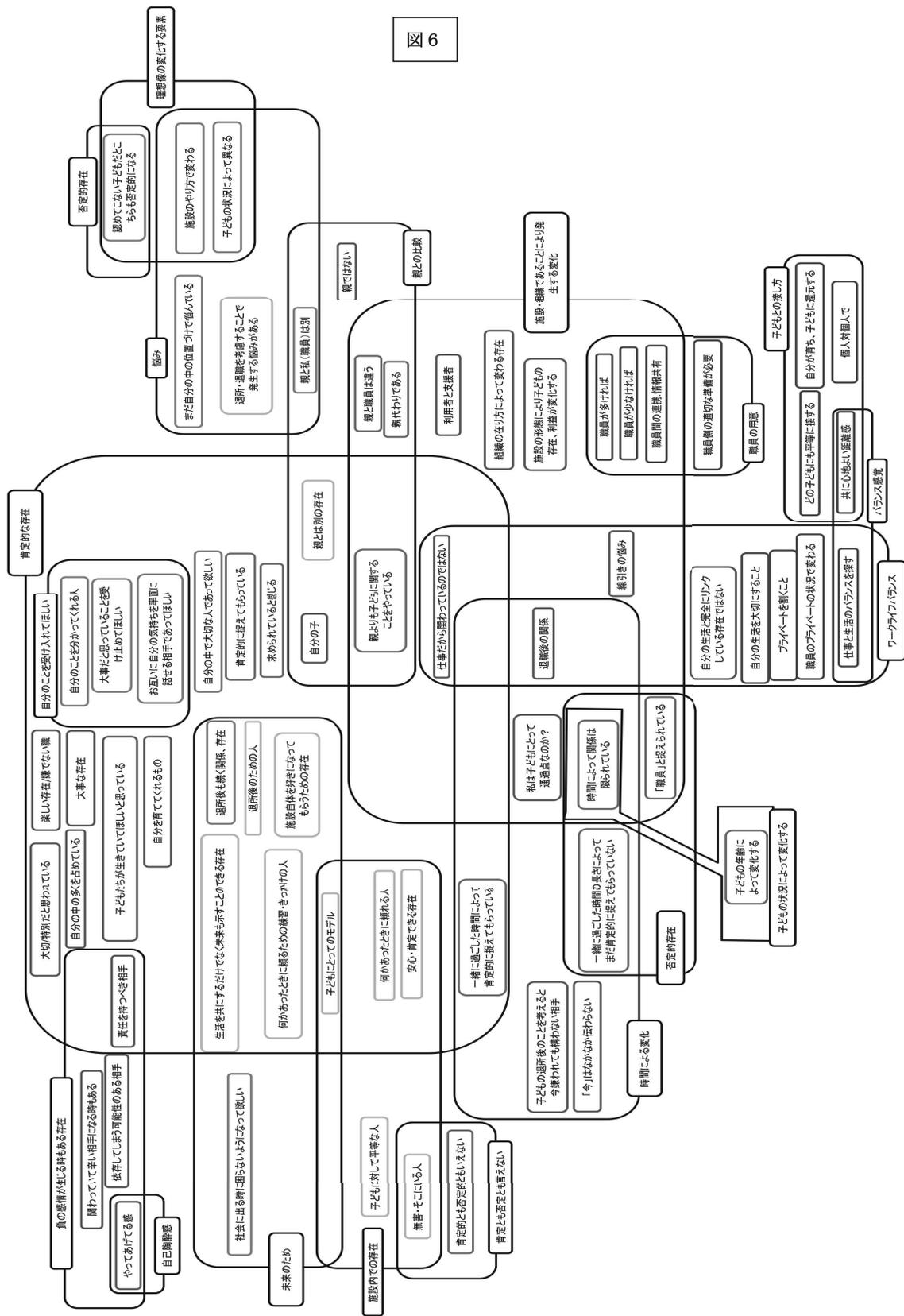


以上のインタビューから得られた疑問、立てられた推測と、個人的体験から生じた疑問等から29の質問項目を作成した。

また職員の語りから得られた要素で最も多くの声に見られた“肯定的な存在”という要素について子どもの捉え方を特に確認したいと考えた。そこで子どもが最も肯定的に捉えている職員とそうでない職員の差異について調査するために職員①「あなたが一番信頼できる職員」、職員②「職員①で思い浮かべた職員以外の職員」をそれぞれ一人ずつ思い浮かべて回答を依頼した。(アンケート1) また、子どもの声を自由な言葉で聞き取るた

めに自由記述欄を設け、最後に子ども本人の属性を記入する欄を設けた。(アンケート2)

図 6



アンケート 1

①まず、あなたが一番信頼できる職員を1人思い浮かべてください。その職員について質問に答えてください。

(1) 思い浮かべた職員について、次の表の中の当てはまるものに○をつけ、()には数字や言葉を入れてください。

20～30歳	31～40歳	41～50歳	51歳以上～
出会ってから()年		男性・女性	
担当・ホーム長・施設長・その他()			

(2) 次の表の文を読み、最も当てはまる数字に○を付けてください。数字の内容は以下の通りです。

5・とてもそう思う 4・そう思う 3・どちらとも言えない 2・思わない 1・全くそう思わない

その職員は頑張っていると思う	5	4	3	2	1
その職員と過ごす時間は好きだ	5	4	3	2	1
その職員と私には一緒に過ごした時間の楽しい思い出がある	5	4	3	2	1
その職員に私の気持ちや伝わったと感ずることがある	5	4	3	2	1
その職員とは、施設を出た後も会ったり話したりしたい	5	4	3	2	1
その職員は私を大切にしている	5	4	3	2	1
その職員は親よりも私のことをよく考えてくれている	5	4	3	2	1
その職員と親は絶対に違う	5	4	3	2	1
その職員は私の心の一番中心にいる	5	4	3	2	1
その職員は仕事だから私と関わっている	5	4	3	2	1
その職員のことは特に何とも思っていない	5	4	3	2	1
その職員は私自身を、その職員の思い通りにしようとする	5	4	3	2	1
その職員は私に關係することを、その職員の思い通りにしようとする	5	4	3	2	1
その職員の私に関する対応に満足している	5	4	3	2	1
その職員のことは気に食わない	5	4	3	2	1
その職員の態度によって私のその職員に対する気持ちや行動も変化する	5	4	3	2	1
その職員は私のことを理解している	5	4	3	2	1
その職員に私のことをわかってほしい	5	4	3	2	1
その職員は私自身に対して責任を持っている	5	4	3	2	1
その職員は私に關係すること(生活や進路のことなど)に責任を持っている	5	4	3	2	1
その職員は私に対して責任を持ってほしい	5	4	3	2	1
その職員は私が施設を出た後もずっと施設にいたいと思う	5	4	3	2	1
その職員にはずっとここで働いてほしい	5	4	3	2	1
その職員は他の子どもよりも自分を一番見ていると思う	5	4	3	2	1
その職員は私や他の子どもとを、平等に接していると思う	5	4	3	2	1
その職員には他の子どもよりも自分を見てほしい	5	4	3	2	1
もし施設で生活する中で困ったことがあったら、その職員に相談したい	5	4	3	2	1
もし施設を出た後困ったことがあったら、その職員に相談したい	5	4	3	2	1
何かあったとき、その職員でなくても、施設の他の職員に相談したい	5	4	3	2	1

アンケート2

- ③ あなたが職員について思っていること、感じていること、望んでいることなどがありましたら、ご自由にお書きください。

- ④ あなたが施設について思っていること、感じていること、望んでいることなどがありましたら、ご自由にお書きください。

- ⑤ このアンケートについて、また僕に対して思ったこと、感じたこと、望むことなどがありましたら、ご自由にお書きください。

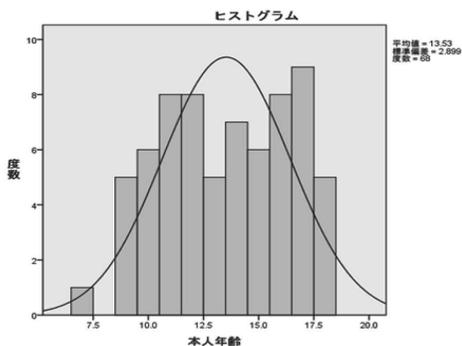
最後に、あなたのことを教えてください	年齢 () 歳	男性・女性	今の施設に来て () 年目			
私は施設の職員全体に対して線引きをしている		5	4	3	2	1
私がいる施設のことが好きだ		5	4	3	2	1

ご協力ありがとうございました！
このアンケートを日本中の施設の子どもたちのために活かしたいと思っております！！

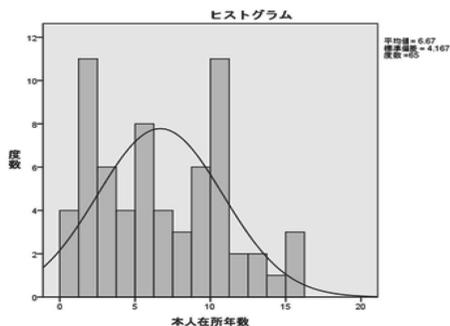
アンケート調査及び統計解析

回答者の基本属性

年齢



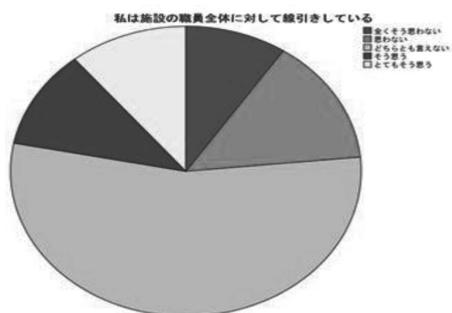
在所年数



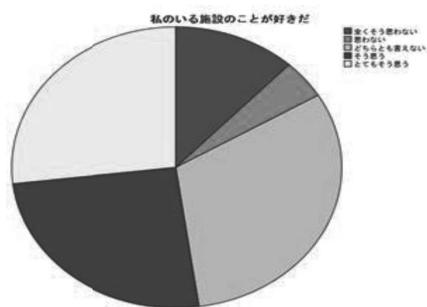
性別

回答者の性別は男性が 36 人、女性が 34 人であった。

施設の職員全体に対して線引きしているか

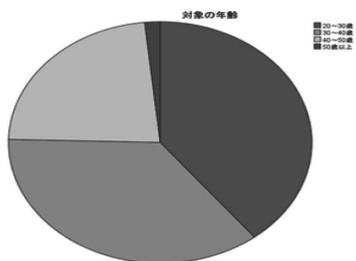


自分のいる施設のことが好きか

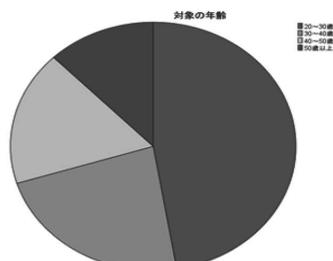


2. 回答の単純集計の結果

職員①「あなたが一番信頼できる職員」職員②「職員①で思い浮かべた職員以外の職員」についての基本属性

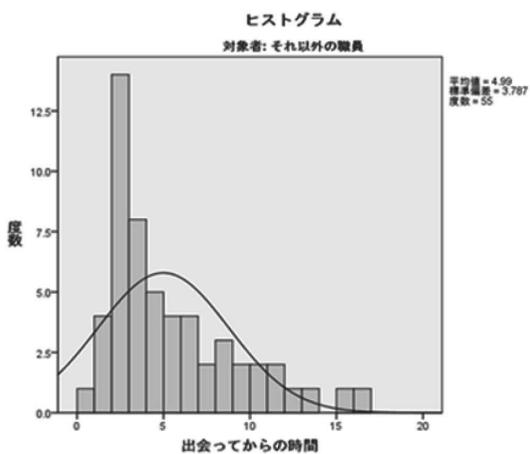


職員①の年齢

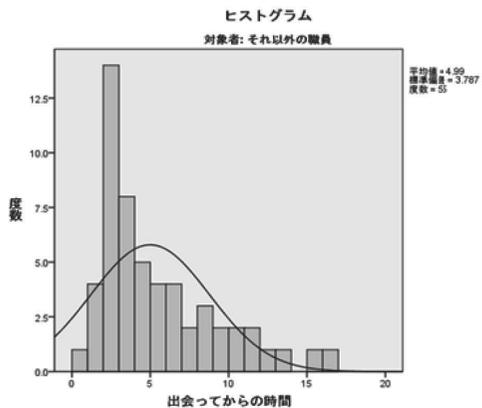


職員②の年齢

出会ってからの時間について

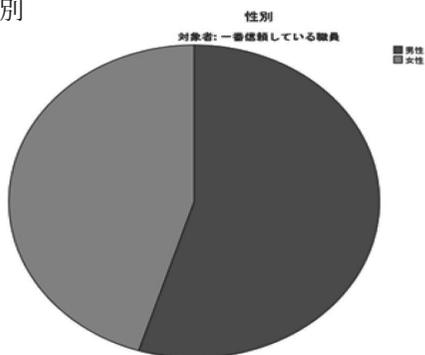


職員①と出会ってからの時間

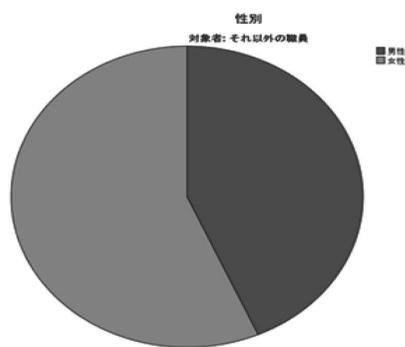


職員②と出会ってからの時間

性別

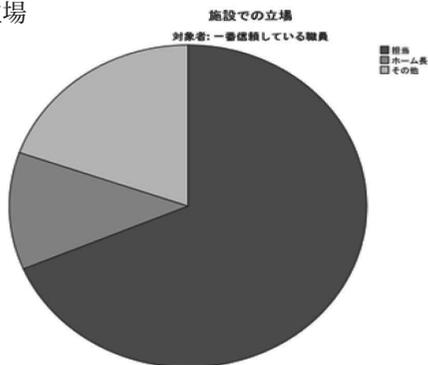


職員①の性別

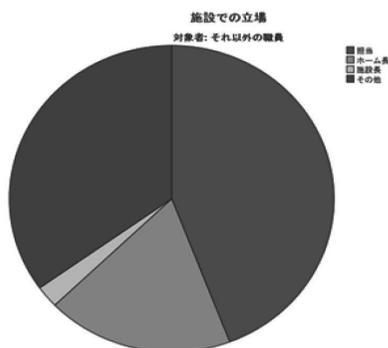


職員②の性別

立場

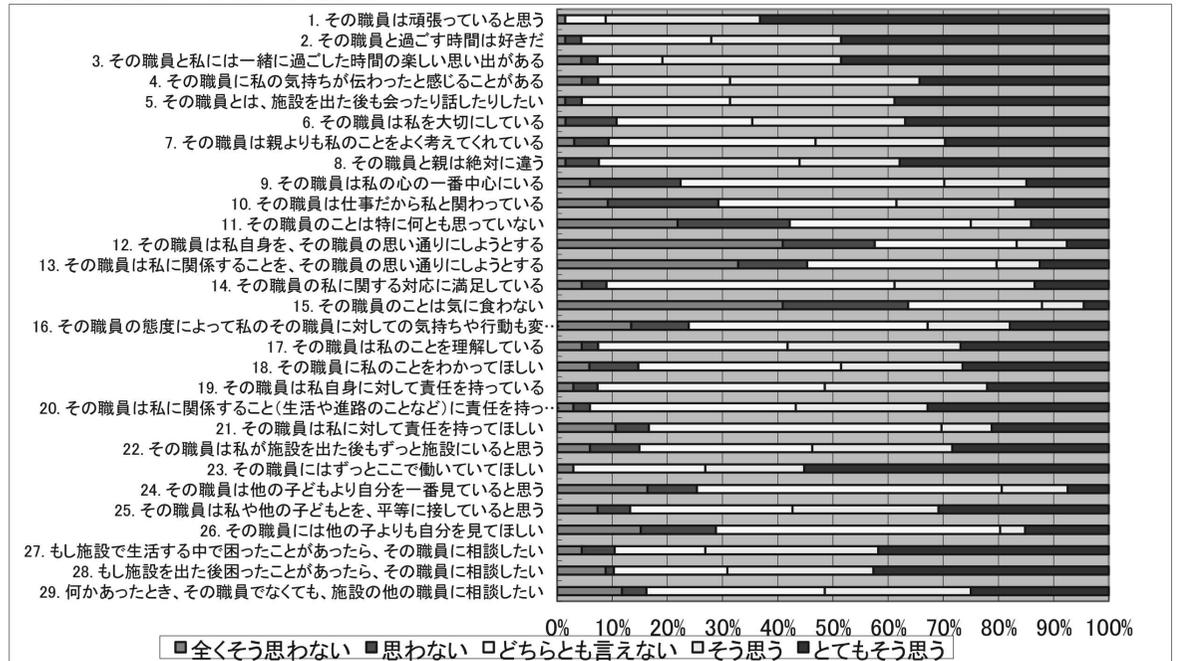


職員①の立場

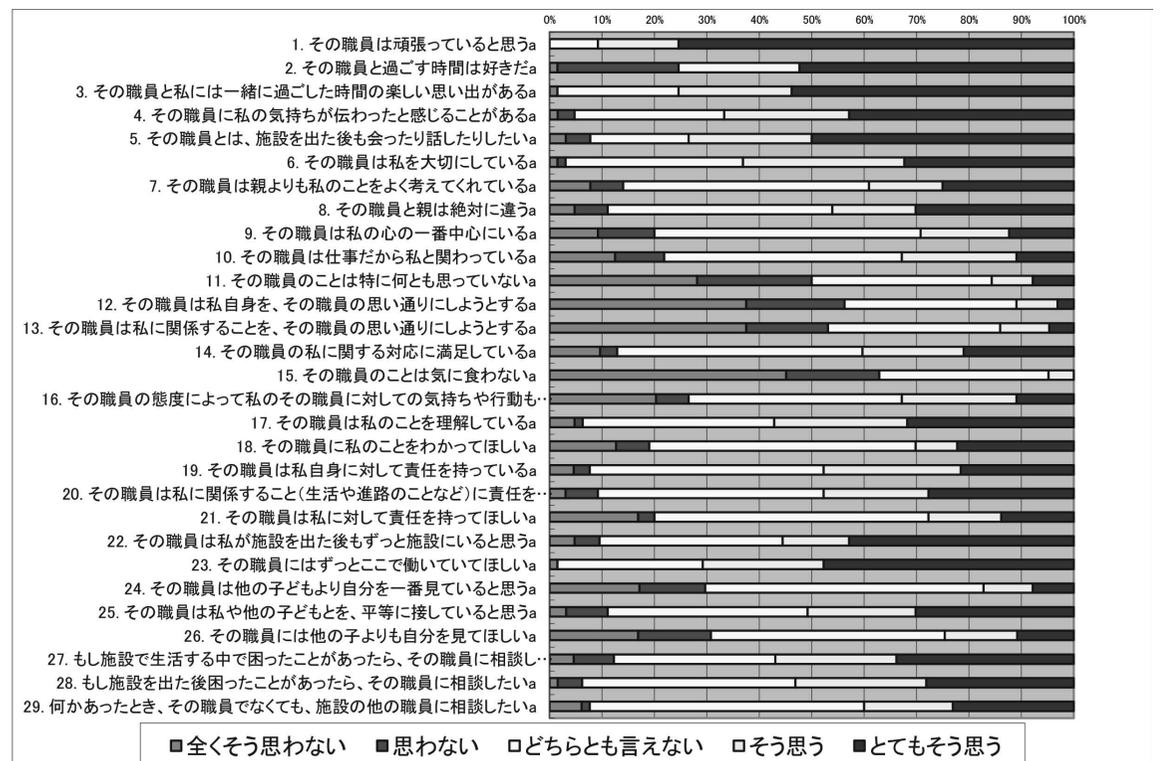


職員②の立場

職員①を対象とした回答の単純集計



職員②を対象とした回答の単純集計



3. 因子分析

因子分析の結果

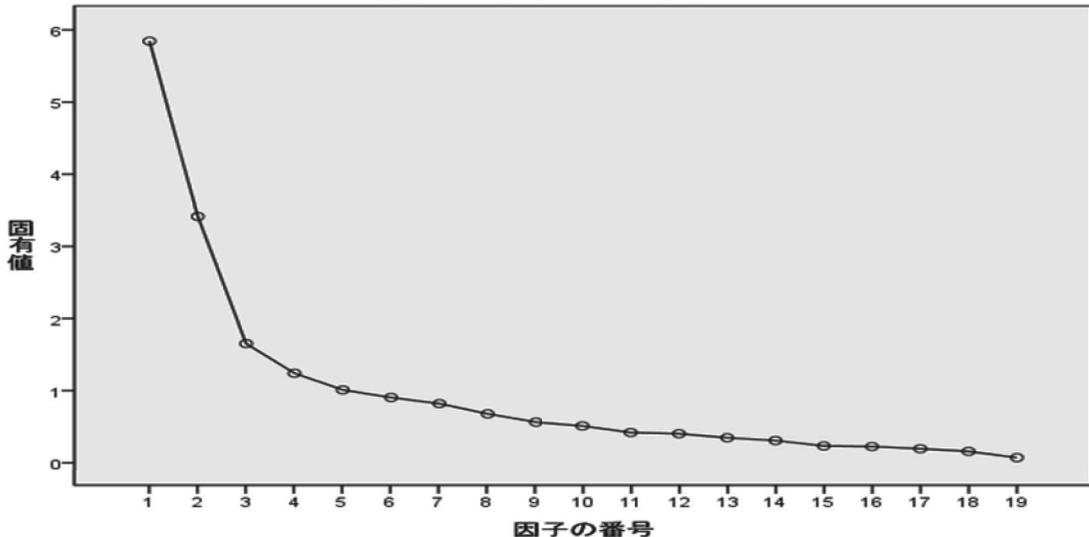
分析の結果抽出された4つの因子を、それぞれを構成する質問項目から名付けた。

それぞれの因子名は第1因子が「信頼感」、

第2因子が「被コントロール感」、第3因子が「要望」、第4因子が「責任」と名付けた。

今回のアンケート調査では、子どもたちはこれら4つの因子によって職員の捉え方に差をつけていることが明らかになった。

因子のスクリープロット

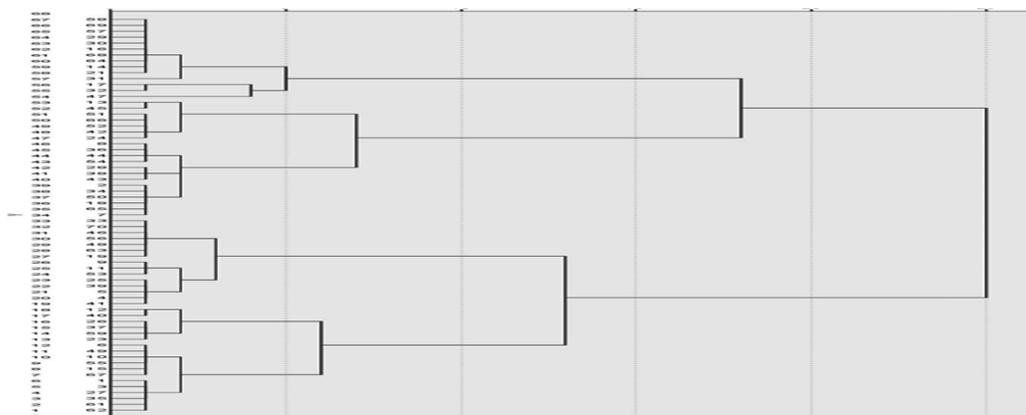


パターン行列^a

	因子			
	信頼感	被コントロール感	要望	責任
6. その職員は私を大切にしている	0.993	-0.032	-0.004	-0.175
4. その職員に私の気持ちが伝わったと感ずることがある	0.838	-0.008	-0.124	-0.018
17. その職員は私のことを理解している	0.582	0.125	0.162	0.272
7. その職員は親よりも私のことをよく考えてくれている	0.578	0.045	-0.228	0.099
25. その職員は私や他の子どもとを、平等に接していると思う	0.538	-0.152	0.085	0.085
28. もし施設を出た後困ったことがあったら、その職員に相談したい	0.454	-0.042	0.229	0.12
13. その職員は私に関係することを、その職員の思い通りにしようとする	-0.066	0.987	-0.043	0.039
12. その職員は私自身を、その職員の思い通りにしようとする	0.01	0.894	0.049	-0.064
21. その職員は私に対して責任を持ってほしい	-0.239	-0.069	0.922	-0.006
18. その職員は私のことをわかってほしい	0.191	0.109	0.67	-0.058
20. その職員は私に関係すること（生活や進路のことなど）に責任を持っている	0.029	-0.042	-0.11	0.885
19. その職員は私自身に対して責任を持っている	0.127	0.02	0.106	0.598

4. クラスタ分析

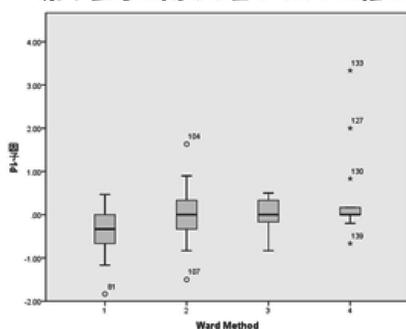
クラスタ分析の結果、回答者は4つのクラスタに分類された。



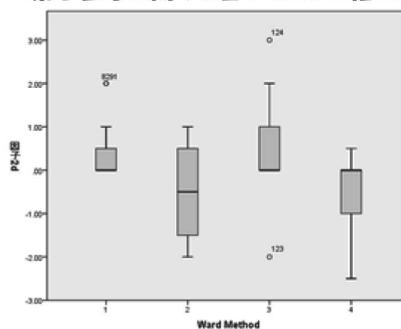
デンドログラム

各クラスタにおける因子の職員①「あなたが一番信頼できる職員」と職員②「職員①で思い浮かべた職員以外の職員」の差に関する分析

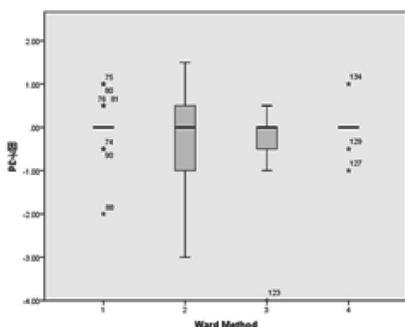
第1因子に関する各クラスタの箱ひげ図



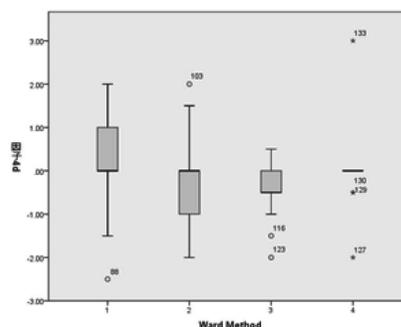
第2因子に関する各クラスタの箱ひげ図



第3因子に関する各クラスタの箱ひげ図



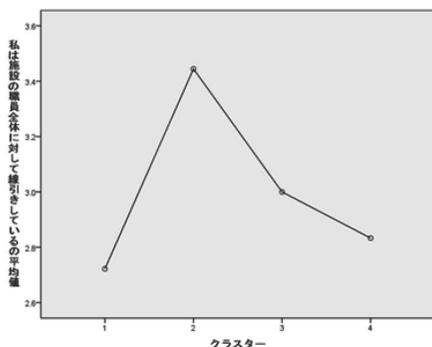
第4因子に関する各クラスタの箱ひげ図



確認できた他の要素との関係

「私は施設の職員全体に対して線引きをしている」と「私のいる施設のことが好きだ」という二つの質問項目の回答結果との関係について

一元配置の分散分析を行ったところ、それぞれ第2クラスタと第4クラスタに関して特徴が見られた。



各クラスタとごとの 「線引きをしている」の平均値

因子分析の結果、子どもは「信頼感」「被コントロール感」「要望」「責任」という因子に注目して捉え方を異ならせていることが明らかになった。

また各クラスタと因子や基本属性との相関関係を確認できたことで、子どもによる職員の捉え方には傾向があることが明らかになった。このことから今回の調査で明らかになった因子以外にも何らかの要素によって職員の捉え方を異ならせているのではないかという更なる推測もできる。

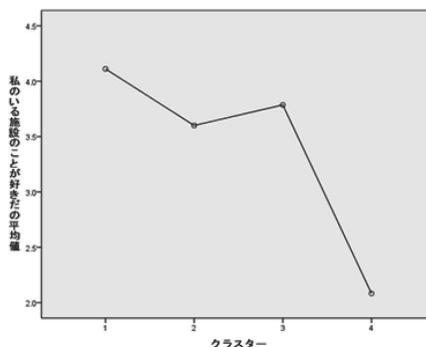
子どもと職員がお互いの存在を捉えることがもたらすもの

～自己実現のためのツールの1つとして～

子どもと職員の視点における共通点と相違点

1. 職員の視点

本研究で行った職員へのインタビューの結果分かったことは、職員は子どもも自分も“肯定的な存在”として捉え、また“肯定的な存在”という理想像を持っているということであった。そして職員が相手（子ども）と自分の存在を捉える際には、非常に多くの要素に影響され



各クラスタとごとの 「施設を好きである」の平均値

ているということも明らかになった。

2. 子どもと職員に共通する視点

その後の子どもへの調査の結果、相手の存在を“肯定的な存在”として捉えている点や、“自分のことを受け入れてほしい”と思っている点などが職員と子どもに共通していることが明らかになった。

3. 子どもと職員で異なる視点

しかし「子どもは自分や相手の年齢、過ぎた時間によって、職員それぞれへの対応を変化させている」「施設のシステムが子ども職員の捉えに影響している」という職員の予想は今回の子どもへの研究結果とは合致しなかった。また子どもが職員の存在を捉えるには、職員の言動やそこから感じ取る気持ちを特に重要視していることがアンケート結果を因子分析した結果から明らかになったが、子どもは個人的状況や施設の状況によっては存在の捉え方が変化しなかったように視点を異ならせている点も確認できた。

4. 視点の違いが生まれている理由

これは調査方法が異なることや調査方法の未熟さ、子ども自身が気づいていないことなどが要因かもしれないが、その一方で子どもと職員は異なる視点で自分と職員の存在を捉えているという仮説が立てられるのではないだろうか。そしてこの説は、児童養護施設という場が占め

る大きさは子どもと職員で大きく異なることに起因しているのではないだろうか考える。生活の場と仕事の場という違いが、子どもと職員が自分と相手の存在を捉えようとするときに共通して持っている視点とそうでない視点を生んでいるのではないだろうか。

5. それぞれの視点の活用法

お互いについてより理解を深めることで、両者にとって良い関係が存在するための方法の一つとできることではないだろうか考える。また、困難を多く抱える子どもと多くの視点を持つ大人が同時に存在する児童養護施設という場では、子どもの視点について職員が理解をすることが子どもへの支援の質の向上に繋がるのではないだろうか。

子どもと職員それぞれの立場に基づいた視点とその価値のありか

今施設で暮らしている子ども、職員、当事者はそれぞれ固有の視点があるだろう。もちろん、それぞれがお互いのことを完全に分かりきることは到底不可能だろう。しかし、分かろうとし、近づこうとすることには大きな意味があるだろう。

そして児童養護施設という、関係が曖昧になりがちな場では、施設に関わる人々がお互いの視点や思いを持ち寄り尊重し合うことで、その立場固有の視点や思いの価値をより高めることができるのではないかと考える。

また児童養護施設では職員が子どもの視点や思いの価値を高めることは、子どもに与えられる支援の質の向上に繋がるだろう。

個人という視点では、「人生」という個人にとって最も長い視点から児童養護施設の子どもの職員との関係性について考えた時に、他人の視点や思いの価値が最も高くなるのではないだろうか。

自分と向き合い、自分の歴史に自分なりの答えを持たせることで人生を豊かにする。

その時には自分だけでなく他の存在の思いや視

点を知り、認めることが必要になるのではないだろうか。

子どもと職員が お互いを知るためのツールの重要性

今回の分析の結果から、子どもには職員の存在を捉える際に重要視する因子や捉え方に傾向が存在することが明らかになったといえる。

しかし傾向の存在が明らかになったとはいえ、子どもや職員の思いや視点はもちろん1人1人異なっているだろう。その異なりの中では、数量的な研究はどのように活かせるのだろうか。

私は、児童養護施設という場ではやはり子どもと職員個人の存在についての捉え方、固有の思いや視点が最も価値があるのではないかと思う。しかし、その捉え方や思い、視点が価値を持つには他人の思いや視点を知り、認めるという長いプロセスが必要になる。そしてそのプロセスの中では大きなエネルギーが必要になるが、子どもも職員もこの長い道りを様々な悩みと共に歩んでいるのが現状ではないだろうか。

このように自分や相手の存在を自分なりに捉えることを求めた場合、数量的研究によって作成された尺度や自分や相手が所属する立場についての傾向を参考にすることは有効な手段でないだろうか。

4. 本研究の成果と今後の課題

研究を探索的に行ったこともあり、本研究では子どもによる職員の存在の捉え方に与えている影響について、4つの因子やいくつかの個人的基本属性が限定的状況下で影響を与えていることまでしか明らかにできなかった。そのため、本研究では明らかにできなかった存在の捉え方に影響を与えるものについて本研究で得られた結果を検証しつつ、さらに発展させていくことが今後の課題で

あると思われる。また本研究では取り組むことのなかった退所した児童による職員存在の捉え方や、職員による子どもの捉え方についての尺度の形成や数量的な研究も求められるのではないだろう。

そして今後は特に「人生」という個人では最も長い視点に注目して研究に取り組みたいと思う。それは「人生」という視点を持ち注目することが、児童養護施設という場を単なる福祉施設ではなくそこに関わる人の人生の大きな一部として捉えることを可能にすると本研究を通して考たからである。

謝辞

本研究に際して協力して下さった皆様に深く感謝致します。

参考文献

- 安部 慎吾, 有村 大士, 永野 咲 (2013) 「児童養護施設における子どもと家族の最善の利益に資する職場環境づくり：職員のワーク・ライフ・バランスの視点から」子どもと福祉 6pp.127-133
- 秋田県児童養護施設協議会第2次特別調査研究委員会 (1999) 「児童は施設(職員)に何を求めているか」児童養護 29 (3) pp.39-41
- 安梅 勅江 (2001) 『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法』医歯薬出版株式会社
- 藤田 哲也 (2012) 「児童養護施設での生活経験のある者からみた『よい職員』とは：入所児と退所児童へのアンケート調査の結果から」金城学院大学論集. 人文科学編 8 (2) pp.180-192
- 林 浩康 (2000) 「児童養護施設職員の子どもの観」社会福祉学 40 (2) pp.136-151
- 井下 理監修 (1999) 『グループインタビューの技法』慶応大学出版会
- 伊藤 嘉余子 (2010) 「児童養護施設入所児童が語る施設生活：インタビュー調査からの分析」社会福祉学 50 (4) pp.82-95
- 構成労働省実態調査 社会的養護の現状について (平成 26 年 3 月版)
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/syakaiteki_yougo/index.html
- 永野 咲 (2010) 『『当事者』の声を聴く！『当事者』と動く！ -NPO 法人社会的養護の当事者参加推進団体『日向ぼっこ』の活動と提言』部落解放 (635) pp.98-107
- 小野寺 君夫 (2012) 「児童養護施設における養育の現状と課題に関する一考察：『子どもと職員が望んでいる支援』と『現在行われている支援』の比較調査 (社会福祉学専攻) 東北福祉大学大学院総合福祉学研究科紀要」 10pp.37-52
- 佐藤秀哲 (2008) 「児童養護施設実践 - 職員と入所児童の関係に関する一考察」流通経済大学大学院社会学研究科論集 (15) pp.31-60
- 千年 よしみ・安部 彩 (2000) 「フォーカス・グループ・ディスカッションの手法と課題：ケーススタディを通じて」人口問題研究 56 (3) pp.56-69
- 高橋 千枝, 内藤 直人, 田丸 敏高, 奥野 隆一, 神谷 哲司, 瀬尾 麻美, 田村 崇, 内藤 綾子 (2009) 「児童養護施設入所児の職員観と生活意識」地域学論集 6 (2) pp.159-171
- 高橋 千枝, 内藤 直人, 田丸 敏高, 奥野 隆一, 神谷 哲司, 瀬尾 麻美, 田村 崇, 内藤 綾子 (2009) 「児童養護施設職員における子どもの捉えに関する考察；フォーカスインタビューによる検討」地域学論集 鳥取大学地域学部紀要 6 (2) pp.173-178
- 山田 勝美 (2005) 「子どもの権利と『子どもの権利条約』」北川 清一 編著『児童福祉施設と実践方法 - 養護原理とソーシャルワーク』中央法規出版